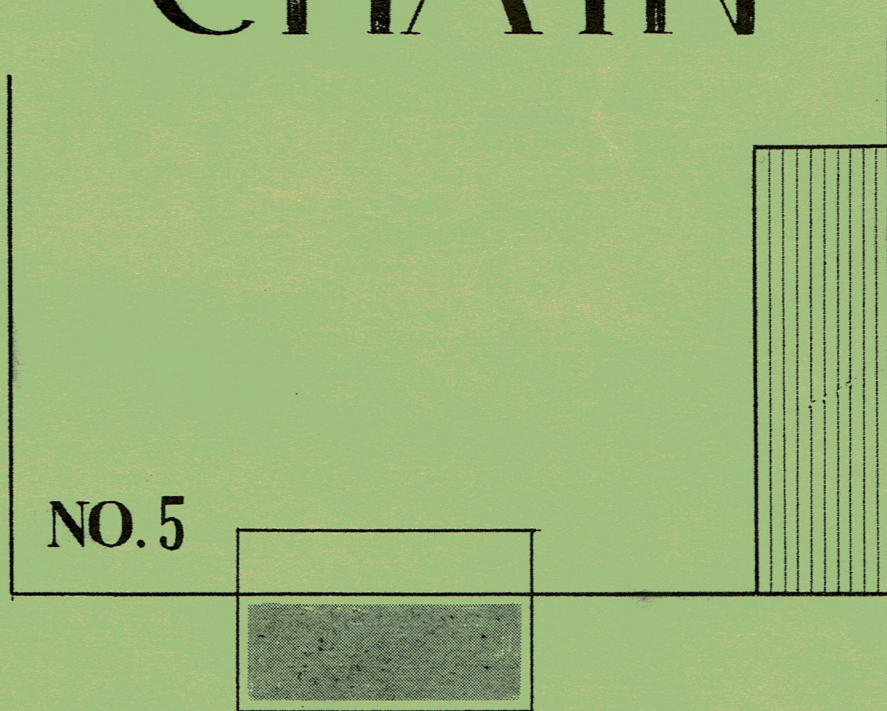


纖維化学科機関誌

CHAIN

NO.5



'60, 6

目次

瀬戸内の詩		鈴木溪太郎	2
北海道紀行(上)		相宅 省吾	3
春	憂	3回生 青 鬼	6
思うまま		1回生 山田 雄亮	8
友 人		3回生 近藤 孝一	9
ある失恋		2回生 私 圭	11
さよなら日本		卒業生 善元(朴)相培	14
世間の人に		2回生 かたつむり	23
五月の詩		1回生 金井 政洋	24
カロザスの <i>Collected papers</i> の中から		3回生 吉井 詢二	27
人を見る眼		2回生 ふてぶて氏	31
学生と能楽		3回生 藤田 清志	33
積分反応入門 (若崎研究室)		松本喜代一	35
研究室紹介			39
編集後記			46

瀬戸内の二月の海の

ほの淡き光ふる朝

ひたひたと春のうしおの

島陰に漁り舟待つ

連絡船 岬過ぐれば

^{みお}
水尾近く浮く鳴どり

汝が心 何を憂ふや

汝が声の悲しき程に

碧き海 光ふる朝

瀬戸内の春の船旅

鈴木 溪太郎

北海道紀行(上) 道南の旅

相宅省吾

旅立ち

うっとおしい梅雨も明けやけつく様な真夏の日照が照りつけるころとなると、長い夏休みがやって来る。私は昨年、毎日36・7度と云える酷暑の京都であえぎながら過していた時、北海道の工場より招待を受けた。

酷照、嵐、水害の京都を後にして、東京で2・3日用事を済ませ、上野の夜行北斗に乗ったのは入月の半ばになっていた。案内は研究生の佐々木さんに何もかもまかせきり、生まれて初めて乗った二等寝台の寝心持について睡り過ぎめどめた時は早や汽車は北上の野を走っていた。牧歌的な風景、関西ではすでに珍しくなった草ぶきの部落をあかず眺めるとか、火山の裾を廻り帆影の少ない海岸を通り青森の港に着いたのは昼もすぎていたと思う。

連絡船は十和田丸、海峡を行く船走は速く風はさわやかだった。船橋にはラジオロケーターの放物鏡がくるくると廻っていた。下北半島の恐山には笹簀が重々しくかかり、海の荒れるのを示していた。四時間余の航海の後、久恋の北海道の山々が見えて来た。函館山、美しい市街、工場等、船が入ると大勢の人々に出迎えを受けた。

函館にて

案内された旅館には何よりも好きな温泉がこんこんと湧き出していた。さわやかな夜風に長夜の宴が続けられた。の燻製、あわび、生のうに、鮭、毛蟹等に新鮮な本場の味は京都では味わえぬものであった。ソーラン節の歌声に夜は更けて行った。

翌る日工場の見学であった。北洋漁業の基地にふさわしくマニラ麻をくしけずり燃り合わせるロープ工場、巨大な機械が回転しながら腕よりも太いマンクロープが作られて行く様は美事であった。此処でも新しい合成繊維が、ビニロンが、ナイロンが、そして紙に関係の深いポリエチレン繊維が激しい競争のスタートを切り始めていた。

それから魚網の工場に行った。親切な資材の人に案内されて5・6階建の壮大な建物にはうず高く鮭、蟹の網と綱がつまれてあった。恐しいような敷量だった。潮の音を放ちながら、オホーツク海の花巻や蟹を扱きながら修理を待っていた。魚網は完全に合成繊維に変わっていた。そこで一度に何トン

もの魚を運ぶモッコはずでに半分近く、ポリエチレン織紐に作られ懸念された摩耗の心配もなく、束年中には麻・マニラ麻のモッコは、ほとんど使われなくなるだろうと云う事だった。そして、新しい資材に対する要求は切実であった。

次の日は肥料工場の見学に行った。珍しい鉛室硫酸と遠くフロリダより運ばれた燐鉍石より作られる過燐酸石灰は白く美しい山をなしており北海道興地農業のスケールの大きさを物語っていた。

親切な工場の人に街を案内してもらった。立待岬の水泳場で全く子供に区った様に泳ぎ廻った珍しい岩磯の浜、沖まで岩礁が続き更布が密生していた。岩礁から岩礁に泳ぎ渡り、泳ぎあくと岩壁をよじ登るとそこには津軽海峡を守った要塞の跡が築かれていた。夏草におおわれた砲台に腰を下ろし、潮の松がる流れを眺めていた。

駒ヶ岳

汽車は函館を離れて北へ進んで行った。原始林にまじり闊葉樹が線路をおおっていた。高原の駅に着いた。標高は余り高くないが、北山の氣こ満ち満ちていた。迎えの道産子(北海道の馬、小型)の引く馬車に揺られて、りんりんなる鈴の音とわだちの首を残し、秋草の咲き乱れる草原を走っていた。朝もやは大沼小沼の湖面を流れ、これから登ろうとする駒ヶ岳は、はるかなスカイラインをひいていた。

美しいホテルに着いた。透明なこんこんと溢れていた湯より上り、服装を整え、3人で船に乗った。エンジンの音も快調に踵運の小沼を抜け、美しい小島の奥に在する大沼に出た。空は全く晴れ渡り駒の倒影は素晴らしかった。山水の美の極致であろう。原始林の岸辺に船をつけ真鍮塔に道を辿って行った。闊葉樹林を抜け広々とした“おみなえし”、我亦紅の咲き乱れる高原を抜け、いよいよ駒の際にさしかかった。遠くから眺めると手入の行き届いた駿馬のその山はだも近づくときぎにくい熔岩の道であった。岩かげには岩栝楸の葉が色どりを添えていた。

火口原についた。砂漠の様な平原が広々と続いていた。空はあく逗青く、翳雲がはるか噴火湾の波のかなたに這続いている。火口は底知れぬ深さであり、それから流れた泥流は川をせき止める大沼、小沼じゅん菜沼を形造り、噴火湾に流れ込んだと云うことである。

おいしいジュースや果物にのどをうるおし、我々3人の外唯一人も見かけない静寂なる山に過ぎ行く時を忘れる程であった。

走る様に山をかけ下り、湖岸についたのは日足の長い北の國でも夕映えが

湖面に流れていた。はるか向こうから迎いのモーターボートがやって来た。心持良い波の音と山登りを終えた満足感と夕陽に輝く湖を抜けてホテルの船着場に帰って来た時は静かな夜のとばりが下り、寂としていた。主人は函館より来て居られた。

屋形船

さわやかな湯で疲れと汗を流し、軽い夕食をとって一同は夕闇の湖畔に出た。そこには屋形船が用意されていた、屋形船には灯が入り、暗い湖面に漕ぎ出された。やがて月が上って来た。酔う程に食べる程に美しい歌が流れ出した。さわやかな微風が吹く中を、櫓の水を切る中を月影の金波銀波は流れ、睡蓮がただよっていた。そして主人や客の船べりからは、白楽天の尋陽江の詩や、ゲーテの水睡蓮の歌がロザさまれていた。歌が終って昏は静かな物思いに沈んでいった。船は広々とした大沼の湖心にやっとなつた。やがて昔の思い出になった。若い人達は町き手にまわり、中筆の人の目は生々と輝いていた。悲しい青春の古えの思い出も年月と共になつかしく思い出される様になったとは。

歌い、語り、夜の更けるのも忘れ屋形につるされた灯も油がつき、次々と消えていった。夜霧が静かに軽衣を濡らす頃となつて一同は原始林の道を通ってホテルに帰った。夜半目覚めて湯に入ると月影が深く湯がねまで差し込んで来た。

天地創造

主人に別れて我々三人は、汽車で更に北へ向つた。噴火湾にぞつて美しい海岸を通り、バスで静かな農村を過ぎ、洞爺湖畔についた。激しい嵐が荒れ狂っていた。それが過ぎると洗れた様な青空になった。休んでいた遊覧船も動き出し、雨雲が去ると、羊蹄山がくつきりとその雄姿を見せ始めた。朝には昭和山、有珠岳が真新しい創生の形を示し立ち上る噴煙はその恐気を示していた。天地創造の姿は登別温泉にも見られた。巨大な爆裂火口には熱湯が沸々とたぎっていた。そして川はごーごーと音を立て、無限の湯量の流れとなつて流れていた。そこには大きな温泉町が生まれていた。

私たちの泊つたのは、オー竜本館であった。広大なる浴場には大小無数の浴槽があり、硫黄泉、塩類泉、明ばん泉等々とあらゆる泉質のものが含まれていた。何百人という老若男女の浴客は創生期の昔に返つてなまつ姿で湯に打たれ、ゆあみりて激しい生計(イ) (2)の余暇を楽しんでいた。おつらかな太古の姿をこの近代的な大温泉に見出すのは楽しいことであつた。

春 息

— せい 鬼 —
青

せせらぎのおと

むねにひびき

いわをかむながれ

ちをあらう

されどわがころ

すみゆがず

しやくなげのはな

うすべににもえ

みどりにはえて

めにしみる

されどわがころ

うきたたず

あめぐもの

こころをとざし

らいめいの

みみをあつす

されどわがころ

しづかなり

あまのめぐみの

あたたかさ

ひかりは

われをみちびきて

かぜは

われをあいぶする

さればこそ
わがこころ

ひらきてともに
はるをうたう。

五月の夕

北山に、陽は落ちて
ピンクの帯は 暮いゆく

^{ナイト}黒き騎士の、佩刀は
鋭き光 空を切る

^{ナイト}騎士のガウンを、取り去れば
冷たく冴える、^{いけあめ}深青に

ほんのり、優しき
夜の クイーン

彼女のお供は、ころころと
おしやべり好きの キューピット

我物顔で さらめける
^{さつき}五月晴れの 夜半の空。

三回生 片山

思ふまゝ

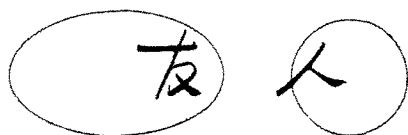
一回生 山田 雄亮

はや入学してから一ヶ月になる。今思えば、苦斗の連続だった予備校生活が楽しい思い出になる。ほんとにただ大学合格だけを目標にして、よくもまあおぼが正直にやっ来て来たものだと思う。あの一年は、身動き出来ない様に縛られた勉強という虫になった様な苦しい一年であった。それだけに国立一期大学に失敗した時のショックも大きなものだった。ほんとに死んでしまいたい様な気持だった。同級の者がどんどん合格してゆくのをみるにつけ、又周囲の者がいろいろと慰めてくれるにつけ、自分が情なく、恥かしくて居たたまれなかった。その上余す所二十日余りで、倍率二十四倍という大学をひかえて、不安がつのるばかりであった。誰を頼るにも頼る人がなく、もしこれに失敗したら、僕は一体どうすれば良いのだろうかという気持で一杯だった。一年の浪人でもう身体、精神共に使いつくし、二年も浪人しようという力はなかった。もしやっていたとしたら、今頃はおそらく倒れてしまっているだろう。京工織の入学試験を二三日にひかえて、今まで見向きもしなかった神様や仏様にも、心から祈った。困った時の神頼みと言うが、本当に真剣だった。試験当日「いよいよこれで最後だ。一生一代の大勝負をやるのだ」こんな気持で試験に向った。問題自体は難しくはないが、それだけに油断がならなかった。「五十人の受験場にわずかに二人だけしか合格しないのだ」という気持が常にこびりついてた。やっと試験が終わって、二日間ほど朝から晩まで死んだ様に寝ていたという事だ。いよいよ発表の日の朝、母が寝ている僕をゆり動かして「出てる出てる、ほら、うれしいやろ、よかったなァよかったなァ」と涙ぐみながら新聞を見せてくれた。僕にはうれしいという気持も良かったという気持もしなかった。ただ「やれやれやっ終わった」という気持だけだった。

それから一ヶ月経った今、まだこの気持のぬけきらないまま現在の心境を分析してみるのだが、どうも今の自分の気持は「やれやれこれで勝負も終わったのだ」という気持が大半を占めてしまって、まだ将来なにになって、どのような大学生活をしてやろうと云う目標が、はっきり定まっていな。

この一ヶ月間の大学生活で、だいたい大学の様子がわかったのだが、今ま

で自分で自分を縛りすぎているせい、大学は非常に自由で、大空にはなされた小鳥の様な感じがしている。又上級生の人でも友達と云うよりは、一人の大人、一人の個人として取扱ってもらえるという共に、僕ももう一人前の大人になったのだなあという感じがして、実に楽しい。講義の最中に居眠りしていてもしかられないことも、その一つである。もっとも高校・浪人の頃の様に聞く方の身になって、講義してもらえたらこの居眠りも出来ないであろうが……。又この大学は単科大学なりに良い所が数多くある事もわかった。例えば小人数であるせい、小じんまりとまとまっている。云いがえれば皆が互いに相手を充分に知って、信じ合い、励ましあっている、と云う事である。これは大学の最大の目標である人間養成という主旨の土台であると思う。僕も幸いにして、織維大学の一員となったのだから、早く校風に慣れて、今後ますますこの大学の良い所をのびし、向上させていこうと思う。



3回生 近藤 孝一

小学校時代の友人であるA君が東京の大学に通っている。彼の帰省の度毎にあって旧交をあたためている。彼の在学している大学は一年が教養過程、二年から四年までが専門過程になっており、一年の学年末の試験によって、約一割程度、一年次留置になるそうである。

彼は現役で入学し、一年間、いわゆる東京の大学生活というものを大いに楽しみ、彼からの便りにおいても、色々羨ましく思われた事であった。又その大学についての長所、将来の見込等を聞かされ、全くいい学校へ入ったものだと思ったりした。

かくて、一年たち学年末試験をすませ、彼は東京の大学生としての仕込みをみやげとして、春休みを京都で送るため帰ってきた。心の貪しい自分は、彼の語る東京生活を聞き、映画や小説に出てくるそれを、真の大学生活かと考えもした。まもなく東京から彼を追いかけて来たのは、成績書(通知書)であった。化学他二三の科目が不可のため、現級止めにすると書いてある。化学を落したものは落才になると、当の教科は予め話していたそうである。彼は非常に落胆したが、持ち前の快活さ、経済的余裕から、元気をとりもどし、大学生活を5年間にするのも又楽しからずや、と又、サトウハチローの

如く落オしても名を挙げた人も大勢いると話し、少し遊びすぎたからなあと言いつつ又東京へ帰っていった。

そして又一年過ぎ去り、彼は再び帰京した。一軍前より一層しやれた、タバコも日に20本、酒も度々愛飲する、いわゆるそのようなタイプの学生としてであった。今度は過去の試験を通じ、試験技術も身につけ、又前年より以上気をつけて学校へ行き、うまく試験をうけたから、二軍に進級できるはずだと云っている。でも前の事もあるので、一抹の不安があるという。だから学校から知らせの来るのを待っているようであった。

3月の末彼の家へ寄ると、出て来て、東京へ行って帰って来たところと云う。何の為と聞くと、実は又落ちたという。又化学が不可である。上京して事情を聞きに行ったが、その教授に会えなかったそうだ。

彼に今後の方針を聞くと、今さら転校も出来ず弱っている。でも現在もう一手やりなおすしか他はないと話した。

こちらも云い様がなく、人生には幾度か試練がある。君は現在がそれだと思つて甘受して、ゆっくりかためるのも一つの生き方だと言つた。

4月になり、自分が旅行している間に、彼は上京した。

彼からの手紙

前書、多分、この手紙が着く頃、未だ旅行中の事と思う。手紙でゆっくり旅行の事を聞かせて、れたまえ。

8日に上京、八、九日と下宿を探した。気分転換と他人との交際がわずらわしいからです。

十日、下宿を探しすぐ契約、同居人六人、

中略

明日は学校に様子を見に行こうと思つていますが、胃に何かもたれている様で気が重いです。

昔、こんな小説を読んだ事があります。

戦国時代、或る領主が囚人に次の様な刑罰を与えたのです。ある一定の場所から石を運び、そしてそれで石壁を作らせました。そしてそれが出来上る頃、又それをもとの場所に返えさせたのです。そしてその労働は彼が死ぬまで、永久に続くのです。

その労働は無価値でした。そして彼は永久に労働をなすにがかわらず、生産の喜びを味う事が出来ないのです。

貴方からの便りを、心待ちしています。

— 随 想 —

或る失恋

— C二 私 生 —

何も恋人に見捨てられたり、機のあるがそのまま消えるのが失恋とは限らないと、靖夫は思った。事実三年前に彼が経験したあの恋愛も失恋と評がにふさわしく思われた。恋——と呼ぶかどうかは分からないとしても——を得ようと思えば得られた機会に、自らその好機を遠去かる時、之も事實は失恋に違いなかった。靖夫は自分の日記に次の様に書き記す事は充分はぐられたし、一方無意味な様にも思えた。

「お上手は好意を持たぬ人にだけ言えよ。人生は快楽が目的ではない。人生にはもっと淋しい義務がある。その淋しさを快楽に教える内は人生の激しさを知らぬ人である。私が国立大学に入って得た獲物は最高学府と云う名に驚く事になくなった矣である。この事は存外私には自覚と自信を与えてくれた」。今日一日の所感を記した後、靖夫は後半の文章が誰かの小説の中から引用した事を気付いていた。

「武者小路の『愛と死』は『友情』に酷似している。即ち登場人物が固着している。筋が決まっている。杉子と夏子、その像がぴったり一人になった所にK子があった。夢、夢でありたい。夢に違いない。

「此れお詭実になりませんか」

見れば「友情」である。遠い夏の記憶をまさぐるようにして私はK子を見た。彼女にはそれが不思議であった。「あれは、何か、よく記憶にないけれど雨の降る木曜日の夕方だった。君が同級の男子と一緒に、同じ電車に乗り込んで来て「友情」の話になった。その時その男はそれを通して君に愛を訴えた。車中の事だし、他の乗客も驚いていた。」

「思い出しましたわ」

「それじゃ何も云わなくていい。オー何と云ったのが忘れてしまった」彼女はカソリックの中学を出ているから、言葉が美しかった。田舎の高校には不似合な標準語が不思議と角を立てずに流れ込んで来た。

「だから君からその本を見せられた時、その偶然に驚いたよ」K子はそれっきり黙ってしまった。私がK子が不快にでも思っているのではないが

と心配であった。長いまつ毛が彼女の眼の行方を隠していた。私はおどおどと追いたてられてもするように、話をむすんだ。

「O大で君の名と所を知らない男は馬鹿だと言っている」

「私は不愉快ですわ、誰から聞かれたのです」

「バイト先で。名前は忘れたが英文科の奴だった。でもそれは美人の宿命だ」私はそんな事をぬけぬけと云える自分に驚天した。すっかり度を失って、自分でも何を考えているのかわからない。手まで真赤にして、今云った事さえ判然としなかった。く靖夫はその時恋をしたのではなからうか。もう少し正確に云えば、その瞬間自分の恋を露した事に怖れと希望をまじえた動揺で自分を見失ったに違いない。得難い獲物に肉迫した狩師が一瞬快感の身震いの中に銃を取り落していたのだ。>

「私は美人じゃありません」

「僕も美人が嫌いだ、と云うより怖れている。何時又別の男と心を交わすようになるかわからないし、どんな意志の強い人でも人間だからね。美人はそれだけ機会にも恵まれている」

「『恵まれる』と云う言葉はそんな時には使いません」

「才美に飾られた人は近寄れないもの」

「私には無縁ですわ、そんな事。私は何時も一人でした。誰がどんな噂をたてても」「Yは?」「同級で話もしましたし、家にも行きましたわ。でもそれ以上は……好意を越えませんでした」「Kは?」「嫌いでした。あなたは私をからかっておられるんですね」「僕は何も不自然じゃないし……隠す事もないと思うな。誰と交際してもいいのに」「いいえ、からかって」涙声だった。K子はそのまま背を向けてしまった。

く靖夫はそこに騎士を見た。中世の騎士は終生一人の貴婦人を守るんだと聞いている。今しも、一人の騎士がK子に近付く敵を追払っている。K子の回りから敵を追払った彼は、K子の下に近付く事を許されなかった。淋しい様な独占欲だった。K子の家は大和の方に山を三つ程持っていて、父はM系の会社の部長だった。靖夫のズボンのつぐりから、彼は哀れな父を思った。無類のお人良しのために終に下級官吏で停年が来て、酒に浸っていた。父は自分の不甲斐なさに息子に肩身の狭い思いをさせている事を思い知らされていた。そして彼は息が己に似ず頭抜けた才能を持っている事を、何時も人に誇っていたが、同時に息子から受ける圧迫を自分の自己嫌悪だと思わずにはいられなかった>

「僕は今、真剣になんかなりたくない。それは不自然だし、不誠実だ」

「いいえ、私は……」「何も好んで不幸を選ぶ事はない。君と慕う男性は多い。でも大抵は君を尊けない。怖れている」「……」「僕なんかその両方共出来ない」

「謙遜」

「僕はうぬぼれしか知らない」　　私は素晴らしい生花にペンキで彩色する事はしたくなかった。

靖夫は自分の境遇を怨んだ。彼にはそれがあまりにも皮肉だった。或る政治活動をする団体の中でかなり信望を得ている彼は、何時も平等を説いていた。それが出来ないのは政治の貧困だとなじった。

靖夫は友人と恋の話をする時は、何の経験もない自分を隠して恋だけは平等だと説いた。「あらゆる要素——経済的境遇、才能、軍令、容姿——を超えて恋は成就されるべきだ。恋に抵抗する武器はない。まして恋を打ち破る武器なんかある筈がない」そんな時、友人が笑えない程彼は真剣だった。しかし事実はそうではなかった。K子に向う自分には全ゆる物が武器となって妨害して来た。そしてそんな武器もK子の目には入らないのに靖夫の胸の中まで突き透して来た。彼は自ら後退せねばならなかった。

あれから三年にもなる。しかし今も靖夫はもしK子と自分の境遇が逆様だったら、きっとあの恋は成就していたに違いないと信じている。

原稿募集

内 容……機関誌としてつ目的に適しいもの

形 式……自由。原稿用紙1～8枚。

締 切……6月30日

受 付……学生委員又は編集委員

発行予定　　7月上旬

さよなら日本

三十四年度卒業生

善元(朴)相培

私はいよいよ日本を去る事になった。朝鮮人が自分の国朝鮮へ帰るのは至極当然の事であろう。だが日本に生まれ、日本に育った者にとって、自分を育ててくれた日本と(おそらく永久に)別れる日を数十日先に控えた心境は単純ではない。現在の自分を脱皮して、祖國で新しい人間関係の中に生きようとして、オこの祖國を去ろうとする現在の自分の心境を充分表現する事は、私には出来そうもない。

でも何か書かなければという衝動的な欲求を押さえ切れず、書き出してしまったものの、それが如何に困難な業であるかがすぐに分った。過去の色々な出来事が、走馬燈のように私の脳裡を去来した。それらの一つ一つを丹念に記してゆかなければ気が済まなかった。そしていつの間にか自分自身を、悲劇の主人公に仕立て上げていた。まるで朝鮮民族の悲劇を自分一身が背負っているような錯覚に陥った。緊張したり、興奮したり、或いは煉焼したりしながら書き綴った。支離滅裂になった。ため息をついて投げ出した。

考えてみれば、自分は歴史の流れの中に出てくる無数の渦の中の一つに宿命的に巻き込まれた一ヶの小さな人間にすぎないのだ。渦に巻き込まれ、そしてその渦の形成に参加する一ヶの分子にすぎないのだ。そう考えながら私はこの手記を書き直す事にした。どんなものが書けるか分らないが、そんな事はもはや私にはどうでもよい。唯、過去日本の植民地であつた朝鮮の平凡な一学生が、日本でどんな生活を送り、そして今どんな氣持を抱いて日本を去るか、それを知ってもらえればこの手記の目的は充分果たされたと云えるのだ。

解放・新しい苦難

現在日本には、六十万以上の朝鮮人が在住している、この事實は過去の忌しい思い出の残滓を背負って、重苦しく朝鮮人の脚を圧して来た。六十万の中には祖國を知らない新しい世代の若者もたくさんいる。だが彼等の父母や祖父母達は、その昔帝國主義の暴圧の下に呻吟しながら、故郷での生活の道を断たれ植民地人として海を渡って日本に乗た。それは悲しい陰うつな航海

史て
亮行
を軍
一
の庄
を私
人は
)、
音楽
びら
戦
った
だ
て短
つに
め、
と押
父は
るが
或争
需を
一万
陰帰
父
ミは
三。
三史
こひ
私よ
ざっ
も運
って

史であった。岡釜連絡船の秘める数々の哀話には詩にうたわれ、童謡に詠まれ、流行歌に口ずさまれて朝鮮人の胸に深い傷跡を残して来た。その悲話の一つを年老いた人々は若き日の思い出として私達に話してくれるのだ。

一九四五年八月十五日、日本の降伏によって、半世紀近く続いた帝国主義の圧迫から朝鮮人は解放された。解放の喜びは大きかった。あの当時の熱気は私は今もなつかしく思い出す。「八・一五解放記念日」ともなれば、朝鮮人はトラックに鈴なりになって「大極旗」（現在の「韓国」の旗）を打ち振り、解放歌を高らかに高唱しながら市中をデモンストレーションして、円山音楽堂へと馳せ参じたものだった。小学生の我々は訳もわからずに、半ば恥じらいと優越感の混った興奮を感じながらそれに従った。

戦勝国待遇を得た朝鮮人の一部は、強大な権力を握って思いのままに振舞ったと云う。長い間のウップンが爆発して、確かに行き過ぎはあったらしい。

だが解放の喜びが詠歌出来たのは、それはほんのわずかりの間だった。やがて祖国は、東西世界の冷戦の谷間につき落され、三十八度線によってまっ二つに分断されてしまった。明るく雨けた朝鮮民族の前には再び暗雲がたれ始め、それが今も尚尾を引いている。日本にいる朝鮮人には生活の不安が刻々と押し寄せて来た。植民地時代、裸一貫で玄海灘の荒波を越えて日本に来た父は、幸い善良な日本人にめぐり会って、かなり良い暮らしをして来たのであるが、終戦と同時に会社は首になった。戦時二百万に達した在日朝鮮人は、戦争が終ると続々と帰国の途に向った。私の両親も家売り払って帰国の準備を急いだ。だが改竊に待っていたものは、伝染病と社会不安であった。六十万の朝鮮人を残して帰国の動きはぱったりと止んでしまった。私の家も勿論帰国を断念した。

父は暫々と転を変えたが生活苦は深化していった。家計を維持する為にも母も必死になって立ち働いた。内転もした。買出しもした。ドブロク作りもした。買出しの米を押収された上、一晚当置所に捕われる事もあった。その時子供達は不安におびえながら一夜を明した。とるものも手につかず母の帰りをひた待ちに待った。やっけ果てて消然と帰る母の姿は見るに忍びなかった。私は世の中で、警官程憎い者はなかった。子供達を飢えから守る為にも身をけがらして与えようとする母の愛情を無惨にも踏みにじってしまう悪党であった。私達は警官の悪口を云ってウップンを晴らした。取り上げた米は自分達で喰っているのだろう。まるでドロボウではないかと。

朝鮮人なるが故に

それでも終戦直後の混乱の間は、混乱に便乗して何とか切り抜けてゆく争が出来たが、世の中が安定してくるに従って、日本が敗戦の疲弊から立ち直ってくるに従って、朝鮮人は次第に生活のすべてを失って行った。「朝鮮人」——それは物質生活における桎梏となって具体的に表われ始めた。八・一五終戦は長い間の民族的屈辱からの、精神的抑圧からの解放をもたらしたが、物質生活における差別は依然としてなくならなかった。少くとも我々の身近に關しては却って深まっていった。朝鮮人に与えられた生活の道は、ふてがましい神聖の持主でなければやっまで行くことの出来ないものばかりが残されていた。私達の生命はもはや日本人の善意に托されていた。だが小さな町工場ですえも朝鮮人の雇用を拒否する風潮の中で、生活の苦斗は並大抵のものではない。「日本人だと偽って入社したものの、後に朝鮮人なる争が発覚して首になった例は数知れない。最初から朝鮮人を名乗っていけば、面接試験の席上で「朝鮮と云う国は地球上にないのだ」とか「外国人は一切雇わない」などと云われる始末だ。

私は最近多くの朝鮮青年に出合った。彼等は粟口同音に、自分が朝鮮人なるが故に如何に口惜しい思いをして来たかを語るのである。同じ地で育って、机を並べて勉強しながら、そして決して自分が他の者に比べて成績が悪いといふことはなかった筈なのに唯朝鮮人なるが故に、未来を約束されて就職してゆく日本の友人達と、唇をかんで見送らねばならなかったのだ。

まだ社会へ出ていない私は、幸い小学校時代を除いて朝鮮人と云う理由で差別を受けた直接の体験はない。しかし現在でも日本人の朝鮮人侮視はなくなっていない。

敵地に生きる

圧迫と屈辱から解放されて、表通りへ踊り出て大道を闊歩した朝鮮人も、祖国の分裂、そして駐留軍の態度が硬化するに及んで、再び暗い露路裏をさまよいつかねばならない運命に追いやられた。一九四九年九月「在日朝鮮人連盟」は「団規令」によって解散を命ぜられた。翌年故ダレス國務長官の三十八度線視察に続いて、六月二十五日朝鮮戦争が勃発したのである。(この戦争を共産主義の侵略とみるのが日本人の常識かも知れない。だが良心的な多くの学者は、これはアメリカ帝国主義の計画的侵略であった事を地道な研究によって裏証している。このことは色々の資料にもとずいて詳しく述べたいと思ったが、私の様な者が駄文を弄するまでもなく、やがて歴史が証明す

るであろう)。

オニ次大戦の終結によって主権を奪回した朝鮮人民は泥にまみれて国家建設に献身した。そして、その目にみえて挙る成果に狂気乱舞し、自己の力での偉業に感歎の声を上げたのである。だが三年にわたる苛酷な戦争は人民の血と汗の結晶をことごとく破壊し尽してしまった。それは彼等にとっては、あまりにも冷酷無比な吐棄であつたに違いない。

日本の死の商人達は、血眼になって朝鮮人民を殺す為の弾薬を製造した。彼等は無気味な笑みを浮かべながら我が世の春を詠歌したに違いない。その弾薬は日本の基地から飛び立った米軍の焦土作戦によって小さな半島の半分を焼き尽す為に使われた。

「団規令」によって手足を縛り上げられた在日朝鮮人は、この現実を唯沈痛な面持で見送る他はなかつたのである。

しかしながら世界最強を誇る米軍も、朝鮮人民の前にあえなく屈服した。国土防衛の為に必死になって斗う者と、単なる雇い兵、職業軍人との士気が異なる事を考えれば当然の事ではあるが、彼等が人民軍にどれ丈おそれをなしたかと言う事は、ある朝鮮の青年から聞いた次のエピソードによってわかるであろう。

日本にいる朝鮮の青年活動家達の一行が共和国の国旗をもって、ある山間の道路を通っていると、彼から米軍を乗せたジープがやってくる。一行を認めるとそのジープは、突然停車するや、サーツと後退しはじめたので、あつ近にとられて眺めていると、今度はものすごい勢いで走ってくる。青年の一行は驚いて路傍に道をよけると彼等は機関銃の銃口をザラリと向けて青年達をねらいながら、フルスピードで走り去つたと云うのだ。正に敵地に生きていたのであつた。

ニヒル

朝鮮人の活動が非合法化された事は、個々の朝鮮人の精神生活の上にも少なからぬ影響を及ぼしたのではなからうか。組織的なつながりは我々の生活から姿を消してしまつた。祖国の情報は、日本の新聞紙上で概況を知るにどどまつたが、それも戦争が終ると一般の人々にはもはや祖国からの情報を得る手段はなかつた。「祖国」——それは次々に我々の脳裡から影を萎くして行き、無意識の彼方へと姿を消してしまつた。生活の苦しさが一層それを助長して行つたように思われる。手にとどかない祖国の事よりも、明日の生活について考えねばならなかつた。青年達は啓運するマス・コミの目の中

に身こぎのてしまい、日本人と化していった。

このような時期に私の身の上には、誰もが体験するあの青春期への苦悩が訪れて来た。理想と現実の距離の遠さ。矛盾だらけのきたない社会。「灰色の壁」とどぎされた希望のない未来。死へのあこがれと恐怖……。

私は死について考え 人生の目的について考えた。すべての問題は解けなかった。無能な人間が無限に続く時間の中の瞬間を生きて何の意味があるのだろうか。

私は人間が嫌いになった。人と話すのが嫌いになった。そしてあまりにも無能な自分自身をも忌み嫌った。自己の無能さを朝鮮人に投影してみていた。生来の内攻的な性格につけ加えてこの劣等感自分を孤独へと追いやった。一方現実にも妥協しようとする試みも行なった。私は自分の感情を裏切つて無理に人に話しかけた。その為になる自己嫌悪を押えるのに苦勞した。

私の前には、荒寥たる原野の中に一本道が通っているように思われた。「この道を通る事は俺には意味がない。だが通らないとすれば……」私は周囲を気にかけながら、そしてそれには目もくれず、おずおずと歩んでいた。それがいかにも卑怯でいやしく見えてならなかった。そして私は苦しまぎれの弁解と口実で自分自身を欺きながら、現実を逃避するように大学へ入ったのである。それを考える時、私は自らメスを執つて自分自身に切開手術を施すような苦痛を感じないではいられなかった。

大 学 生 活

誰でもそうだろうと思うが、大学に入って最初に感じたものは失望であった。私は昨年四月、例年行われる繊維化学科の新入生歓迎会に出席してみた。迎えられる者から迎える者になって三年経った。すっかり迎える者の主人公の位置に腰をすえている自分を意識した時、私はあるにがにがしいものを感じないではいられなかった。

三年前、我々が神経をそばだてて、好奇の目をみやりながら拝聴した若崎先生の例の“*Able Engineer Gentleman*”はもはや新鮮な響きはなく、色々な式典で行なわれる祝辞や挨拶から受けるものと何ら変らなかった。「私は諸君を紳士と見做さない。紳士の卵と見做す」おそらく四年間の大学生活を通じて卵からひなにかえるのであろう。

新入生は、この大学で三年間教育を受けた者の“*Able Engineer Gentleman*”の断片でも見せてもらいたかったに違いない。だがそこに現われたものは歓迎の辞ならぬ特定のクラブへの勧誘の辞であつたり、底抜けに陽気な

いざけであった。既に多くの先輩達が社会へ出て *Able Engineer* としての活躍を存分に見せてくれている。先生方の言葉を信じよう。だがあの歓迎会の席上、私は三年前の新鮮な感覚の自分に立ち返って見た時、その時に抱いていた熱っぽいイメージと現在の自分自身とがあまりにも不調和な二重写しとなって描かれているのにやるせない自嘲を感じないではいられなかったのである。私の中に残っていた三年前の新入生は、三年間の大学教育で培われた筈の "*Able Engineer*" のこん跡すら認める事が出来なかった。

有能な紳士とは資本主義の忠実なウェイターではない。まして精密機械でもない。鋭い洞察力と豊かな常識と情操を身につけた主体性のある人間でなければならない。重大な岐路に立たされた時、正しい判断によって積極的な行動に出られる人間でなければならない。

社会現象の上っつらをなぞるだけで満足し、原則論や抽象的思弁を好まない現代のドライな時代は、苛酷な聖験のない戦後の民主主義が生み出したむしろ健康な青春像であるという。私が大学に入って失望を感じたのは、私が民族的な悲劇を背負った祖国をもつ朝鮮人だからであろうか。だが入学当時の私には祖国などという考えはなかった。私は大学生活の中に社会を動かす主体的な力を求めていた。全学連のトロツキズムは非難さるべきであろうが、彼等の正義感や燃えるようなエネルギーには同じ世代としての同情と共鳴を感じないではいられない。私は学生の間に、警販法や砂川問題や安保改訂等、日本の運命を左右するといわれる問題について激しい議論がたたかわされたり、詳しく研究しようという動きが見られないのが不思議である。

学生の本分は勉強する事であろうが、自分の専門分野の勉強の他に、巾広い読書をし、人生を語り、あらゆる社会現象に対して問題意識をもって対決しようという、若者らしい情熱と気迫にみなざっているのが学生生活であるとして一人決めていた私にとっては、全く空虚な現実であった。誰も彼もが幸福であり、自分一人が不幸である様に思えた。そしてすべてに嫌悪を感じながら、ただ惰性的な義務感で学校へ通っていた。

しかしながら時には抵抗を感じ、時には融合している内に、次に現実肯定的な一つの考えに固定して来た。学校の勉強さえしっかりして、適当な所へ就職出来れば、それでいいではないか。その時には色々な悩みも解消されようし、何もむづかしい事を考えたり悩んだりする必要はなからう……

だがやはり、朝鮮人である自分にはそれでは済まされなかったのである。

帰国問題

四回生になれば就職の問題がある。理工科系を出ればなんとかなるだろうと、かなり樂觀視していたが、やはり現実には朝鮮人にとってそう甘いものではなかった。卒業を真近に控えて私は新たな障壁にぶつかる筈であったがそれを救ってくれたのは帰国問題であった。

帰国問題を耳にしたのは一昨年の九月頃であった。当時はまだ三回生でもあり、帰国問題が自分の進路を左右する程に発奮しようとは夢にも考えなかった。およそ日本政府を相手にして帰国が実現されようとは考えられなかった。唯長い間祖国を忘れていた者にとって、観念の世界で祖国という言葉の美しさに酔い、慰めを感じるきっかけを作ったにすぎない。だが翌年一月三十日、外務省の藤山声明は私にとって青天の霹靂のような驚きであった。これは観念の世界から現実の世界への橋渡しをするものであった。

「花見は平壤で」というスローガンの下に帰国運動は熾烈に展開されていた。自分も態度を決めなければならない。帰国が実現すればすぐに帰るべきであろうか。帰らなければならない。生きる事も死ぬ事も出来ない、悪魔にとりつかれたような生活をこれ以上続けるのはごめんだ。

だが帰国問題は予想にたがわず初めから難航した。両国の赤十字社間で簡単に決められる筈の交渉がしばしば奇妙に停滞した。その裏にはパーソンズ米國務次官補やブランサー赤十字総裁らの暗躍があった。

一見会談の行方は混沌として見通しが見つからない様に思われたが、曲折を経ながらも一定の方向を辿っていることを知った時、私は共和国の政府と赤十字代表団に大きな信頼を感じるのであった。

日本国内においても激しいカンパニア斗争が繰り広げられた。何回も市庁や府庁に押しかけた。三十七度の炎天下もいとわず銀輪隊をくり出したり、デモを行なったり或は道行く市民に訴えたりした。「民族の大移動」は大きなセンセーションを巻き起こして、華やかにそのスタートを切ったが、その陰で行なわれた長期にわたるこの奇烈な大衆運動なくしては帰国実現は考えられなかったのである。私はこれらの運動に殆んど欠かさず参加した。その上組織活動にも手をつけた。夜遅くまでがけずりまわり、床につくのは十二時過ぎになることが多かった。「どういう風の吹きまわしがわからない」消極的で無口な、およそ組織活動には向きそうもない私に対して、人はこう云うのであった。私のような者には全く馬鹿げた時間の浪費であったかも知れないが、少なくとも私は帰国を希望している者である。他の人が東奔西走している時に手を援ぬいて傍観する訳にはいかなかった。それよりも、こうする

事が不安な味気ない過渡期を切り抜くようにする者にとって、唯一の充実であったのかも知れない。

今から考えると、私は半ば学業を放棄したも同然であった。経済的な事情の為、学校を退めようかと幾度が考えながらも、周囲の人々の忠告と、帰国問題が挫折するかも知れないと云う現実的な不安に支えられて学校へ通い続けたが、登校するのは登近くになり、早く帰る事が多かった。(学業をおろそかにした事に対して私はそれ程悔いを感じないが、唯その為先生や研究室に対して多大の迷惑をかけたのではないかと苦痛に思う)。

六月十日のジュネーブ会談の事実上の妥結、八月十四日カルカッタでの協定調印と華態が大きく進展する度に私は複雑な興奮にとらわれたが、それらの感情を事細かに記そうと思えば紙敷に足りないように思えるので、昨年十二月十日、正史的な感激に満ちたオー次帰国者の、京都駅での歡送風景を記すにとどめよう。

十二月十日「……プラットホームと広間は見送りの群衆でうずまいた。どんな興奮で上気している。人々を無表情な孤蝕へと追いやるのが都会の雑踏である、だが今日ばかりは、人々は遠慮なく素朴な人間の感情を赤裸々に表現した。正史は見事な演出家だ。

どよめきと拍手に抱まれて、帰国列車がすべるようにしてホームに入る。かたずをのんでこの瞬間を見守る。絶えまない歌声と合唱、万葉三唱——興奮の渦にのまれて気が遠くなりそうであった。

思えば苦しい筈であった。焼けつくような真夏の太陽を頭上にあて、汗みどろになって都大路を駆けめぐった思い出が目まぐるしく脳裡に渦巻く。その努力は報われたのだ。目の前に帰国列車が見えているではないか。羽がつかまった。

七時四十四分、発車の時刻が到来する。駅声のどよめきが一さね高く上る。手に手に打ち振る小旗が頭上で嵐のようにどわめく。フラッシュが交錯する。カメラの照明がまぶしく輝きながら列車と共にゆるゆると動き出す。喜びと悲しみの思い出をのせて、オー次帰国列車は乗船地新潟へ向けて発車した。

そして十二月十四日、多くの朝鮮人はテレビの前にかじりつき、涙を流しながら出航風景をみつめていたのである。その昔、彼等が虫けらの如く小さな船底に押しこめられて、玄海灘の荒波を越えて祖国を後にした事を思い起し、無限の感慨にふたりながら……。

さよなら日本

帰国運動の影響は大きかった。祖国を知った青年達は自己の人生観を百八十度回転させた。浮草から根をもった人間へと変って行った。私は歴史の流れを眼のあたり見せつけられたような気がする。巨大な岩石が目の前で激しく動くのを見るような感動を覚えた。一九五九年は私にとって忘れられない年となった。

我々は仕方なく帰るのではない。私がある日本の知人に、私が国へ帰る事を話すと彼は非常に同情的な目つきで私を眺めていた。日本にとって朝鮮は最も近い国であり、最も関係の深かった国である。だが日本人が最も知らない国は朝鮮ではなからうか。朝鮮は若い「民主主義」の国である。平凡な労働者が金を使わず代議士になっている。人民の要求を政府は無視出来ない仕組みになっている。我々は日本の若者達を気の毒に思っている。

正直なところ、私は日本にあまり未練はない。それでも日本はオニの故郷だ。いつか私は私を育ててくれた土地をなつかしく思い起こすことであろう。幼い頃、魚をとってたわむれた川の流れるを、夏の宵ともなれば、夕陽が川面にはえて黄金の洪水がまぶしく目を射るのをさけながら、散歩がてらに渡った橋のたたずまいを。そして刻々と色を変えながら、神秘的ヴェールに包まれるようにして暮れてゆく山々の姿を……。

さよなら日本。

(1960.2.2)

編集部紹介

4回生 太田 晋一 3回生 早川 和彦

3回生 荒瀬 治夫 3回生 荒谷 善夫

現在、編集委員は、一部有志が成っている状態ですが、2、1回生には居りませんし、又、本誌の目的からして、クラス委員の加入が望ましいと思います。学生諸君の批判及び協力を期待します。

世間の人に

C2 かたつむり

君は一体何を考えてるんだ？

あまり多勢が何度も聞くから
自分が何を考えているのが分らなくなる。

実は。 ちょっと待った

「抗議は自己弁護なり」と云った友人の顔がみえる。
ただ少頃黙っていてくれ

人が弁護してくれるのを待っていた。

親友が冷淡に同情してくれたから
自分に弁護される資格のない事を悟ってしまった。

馬鹿はバカで救いようがある

小ざかしい馬鹿げた人間は救いようがない。

それが大学生だと云ったら

特に理屈の巧みな奴は 冷笑するだろう。

止めてくれ。生きていたら^{ソチ}20才になったなんて。

20才まで生きて来た事を思え。

欲深い親爺とおふくろが今日まで食わしてきた
未来の大器は…… 何も云いたくない。

始末の悪いのが大人である。

寸志では誰も弁護してくれなくなった。

それでも無料の屁理屈師は案外もろい者だ
それを利して食っている奴がいる。

もう少し黙って立ち止って凝視したら
其奴が死ぬ前に自分が死にたくなるだろう。

今じゃないか。皆が一人ずつちよつとだけ
目新しい事をしなければならんのは。

小ざかしい奴のモナキーでもあるまい。この世間は。

五月の詩

一回生
金井政洋

1) 五月の歌は誰が歌う
銀杏並木の緑子が
川の流れが
かぐわしき五月の風が

2) 五月の風は甘いささやき
川辺の柳をかすかにふるわせ
乙女の黒髪をなびかせながら
電車の中を通り抜けていく

3) 五月の雨は真珠のくさり
つばめが忙しく飛びまわる時
もみは新緑のヴェールを被り
松の若針はためらいながら玉をこぼす

4) あらゆるものが緑にもえる時
あらゆるものが生命力を謳歌する時
かぐわしき香大空に満ち満ちて
この大自然が五月を歌い
五月が我々に話しかける

Full of fresh scents
Are the budding boughs
Arching high over
A cool green house ;

Full of sweet scents
And whispering air
Which sayeth softly :
" We spread no snare ;

"Here dwell in safety,
Here dwell alone.

— C. G. Rossetti —

この詩はより五月にふさわしい、いや五月そのものを
うたっているような気がする。

a cool green house この一句が本当に生きている
と思う。

五 月

一季中のうちでも五月といえは何かしら心の中が楽しくなる。西洋では昔
からこの月は不運な月（特に結婚には）とされているらしいが、それでも英
国などでは一季で最も楽しい、花の咲き乱れる五月であるらしい。May
Dayと云えばすぐに「労働祭」と思い出すが、本来は五月の花祭りのことで
Walter Scott の詩にも"Queen of May"をうたっているが、その季に
選ばれた、村一番の美しく賢い少女を中心に、春の一日を祝い、踊り過ごす
風習があったということだ。

それにしても本当に、特別な何かがあるような気がする。「五月」はすば
らしい響きを持っている。

銀 杏

電車の中から見ると丁度経木モールをぐるぐると太枝に巻きつけたよう
であるが、近寄ってよく見ると、一皮一皮がぎっしりつまって並んでいる。太
い幹からも可愛らしい赤児か手のひらのように、やわらかそうで、みずみず
しい若葉が顔をのぞかせている。

いちょうの一片一葉にもすばらしい生命力の躍動が感じられる。あの花木の
ようなごつごつした幹の中に、あのようなエネルギーが隠されていたのかと
思うと、何か不思議な感じがする。

試みに金田一の国語辞典と引いてみると——いちょう（銀杏・公孫樹・鴨
脚樹）（イチヨウは慣用語名透くち）銀杏科の落葉喬木。葉は扇形。四月頃花
を開く。果実は黄色。球状で、種子は食用——どれもすごいめで字だ。
銀杏という字は知っていたが、後二者は見たこともない。「脚」と云えば正
確ではないが、なる程鴨の木がきに似ていないこともない。「かもきやくじ
ゃ」もおかしいので、「こうせんじゅ」を引いてみると、なる程あることは
あるが——〔公孫樹〕（榧）→（いちょう）——ではどうにもならない。それに
しても考えてみると、銀杏も「ざんなん」に近いような気がするので、みると、

やはり — ぎんなん(銀杏)(名) 公孫樹(イチヨウ)の種子 — とあった。
(全く辞書もずるいものだ)。

銀の杏(杏子)悪くはないが、色は、はるかに金の方に近い。理屈ではな
かなかいかぬものだ。

物好きついでに英語の辞書も引いてみることにする。まず和英を引き、研
究社の新簡約を引くと — *ginkgo or gingko* (ginkou) n. いちよう
ginkgo nut (ぎんなん) — なる程これなら話はわかる。

もう一つあった — *maidenhair-tree* いちよう (*ginkgo*) *maiden-*
hair n. アジアンタム(はこね草、くじゃく草の類の優美なしだ類) — と
あったが「乙女の黒髪」とぞ美しいのだろう。はこね草もくじゃく草も知ら
ないが、どこがいちように似ている所でもあるのだろうか。銀杏については
思い出があるが次の機会にゆずる事にする。

途 中 で

八号教室 — 下席

雨が静かに降っている。はっきりとはわからないが、土がうるおい、屋根
の瓦が黒ずみ、木々が色相を一層鮮やかにするのを見ると、なる程降ってい
るのだなとわかる。入口にはポストがあった。火災報知機がつつ立ち、そば
にはしだれ桑が一本。

本館も雨にぬれると一段と美しくなる。とんがり屋根は青さびのようにし
っとり落ちついた色相で、今にも鐘の音が、カランコロんと鳴りそうな錯
覚におちいりそうだ。すずめはかまわず楽しげに、木から木、木から屋根へ
と飛びまわっている。時々つばめも通り過ぎて行く。

皆がどっと笑い、はっと我に返る。つつじが目にしみるような美しさだ。

電 車

実験のある日、掃除当番だったので遅くなった。電車は混んでいるので窓
ぎわに立つ。雨滴がはげしくぶっかって、静かに落ちて行く。端の方は流れ
るように早い。鉄棒を頭だれがほわり、途中で落ちながら次々と後に流れて
行く。突然驚いたかのように前へ流れ出す。電車は停った。赤、青、黄、灯
いたり消えたりしながら、すべての雨滴がきらきら輝いている。「京辰」の
セロレーベルを通してみると、河原町を過ぎたようだ。賀茂川にかかり、辺
りは暗闇につつまれているが、朝日会館の方は一段と明るい。降りる用意を
する。

カロザスの

COLLECTED PAPERS の中から(I)

三回生 吉井 詢 二

W. H. Carothers (1896-1937)

偶々カロザスの論文集を入手したので、筆をとった次第である。因みに、小生の生まれた年は1938年で、この年には世界の繊維産業に、一つの岐点を訪れた年である。即ちカロザスのナイロンがそれであり、ドイツでは、一方、Pe Ce Faserが作られた時である。なお翌1939年には、京大でヴィニコンが発明された事は周知のことである。だから合成繊維は、私達の生命の生長と共に、発育、発達して来た訳で、その未来たるや光輝あふるるものであろう。

日進月歩する高分子の分野のこと故、彼の論文集も、最早、古きに属するかも知れないが、「温古知新」の古諺もある如く、「古きを尋ね、新しさを知る事」も大切な事ではないかと思う故、この拙き筆をとった訳である。

カロザスは高分子化学についての私達の知識を発展させたというのみならず、且又、工業的に有用なる合成重合体（*cf.* ナイロン等）の進歩発展の礎を築いた誠に有能な研究者であった。実際、彼は12年という短期間の間に我々が一生かかっても出来ないかも知れないような仕事を成し遂げたのである。

尚、彼の生涯に就いて、詳しく知りたいなら、井本稔著「ナイロンの発見」を参照せられたい。この小冊子は、本学部図書館にも備わっている。人生の哀感が胸にせまって来るような本だ。

彼の重合及び重合体に関する研究は、はつきりした二つのものから成っていると言え、即ち、

(i) *Studies on Polymerization and Ring Formation.*

(ii) *Acetylene Polymers and their Derivatives.*

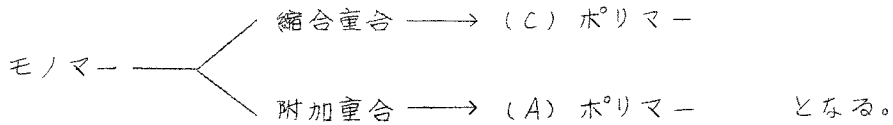
の二書である。

(i) は多官能性分子の反復縮合によって形成される縮合重合体に関するもの

で、これはポリアミド、ポリエステル、及びポリアンヒドライド等で典型的なものであって、この研究は更に合成ポリアミド製品としてのナイロンの製造という工業上の発展のもととなった。

(ii) は共軛系の自己附加、特に、塩素及び他の置換体を含むところの共軛ブタジエン系の自己附加によって、作られたポリマーに關するもので、ここからは、二つのアセチレンポリマー、即ち、ヴィニルアセチレンと、ジヴィニルアセチレンの化学反応に注意が向けられている。この研究は又合成ゴム（ネオプレン）の発展の母体となった。彼の論文の大部分は、*Journ. Am. Chem. Soc.* に載せられたものである。

まず、(1) より始めると、これは彼が1926年から1936年の間に書いた28の論文からなっている。彼は巨大分子を作り上げる反応を、縮合重合、附加重合とに分け、それからの過程によって、出来たポリマーを夫々、Cポリマー、Aポリマーと呼んだ。即ち、



彼によれば、重合 (polymerization) とは

Polymerization is the chemical union of many similar molecules either (A) without, or (C) with the elimination of simpler molecules (H₂O, HCl, NaCl, NH₃ etc)

即ち、多くの似た分子が結合して、巨大分子を形成することを意味する。

A-polymers :- これは、monomerの反復附加により出来るもので、この monomer, (mono = one, mer = part) とは、分子が重合する前の単量体をいい、重合によって出来たものが、ポリマーである。ゴム、ポリスチレン、パラアセトアルデヒドやオレフィン、ビニル化合物のポリマーがその例である。(図I参照) モノマーをAとすると、-A-が構造単位で、-A-A-A-A-A-A-A- で表わされるポリマーである。

C-polymers :- モノマーの反復縮合によって得られるもので、モノマーの分子式は構造単位のものとは異なる。縮合の際に水やHCl NaCl NH₃等の簡単な分子が取除かれる。

(構造単位とは、モノマーと同じ原子を持っている高分子

中の重合単位の事で、彼の *Terminology* に依れば、ポリマーを構成している所の二価のラジカルの事である。ポリマーの例としては、セルローズ、シルクフィブロイン、ナイロン 66、テリレン等を上げる。(図 I 参照)

しかし現在では、上の二つの分け方だけでなく、もっと細かく分けられている。例えば、附加重合、縮合重合、附加縮合、閉環重合、重附加等である。くわしい事は専門の本を参照せられたい。

カロザスの (i) の 28 の論文中 (I から XIV) 迄のものは、主として二塩基酸とグリコール、又はジアマイドとの反応に向けられ、研究し尽された。その反応が起これば、低分子量或いは高分子量の直鎖状ポリマーになるであろうか。又は、反応基を含まない大きい環、或いは小さい環になるであろうか。このどちらになるかという可能性について論じられており、又出来た生成物の分子量は幾程であろうか。という事に終始している。

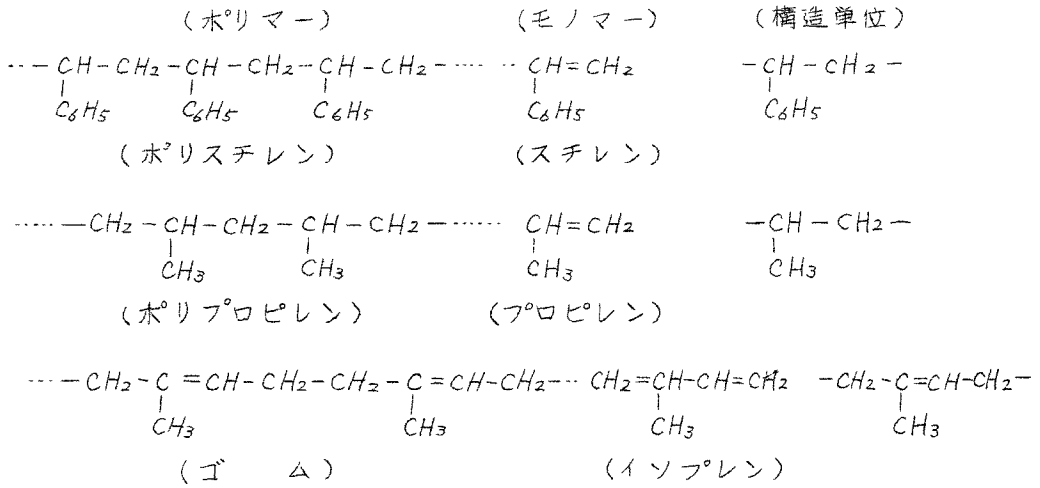
論文 XV, XVIII, XIX では部分的ではあるが、高分子化合物の挙動に関する問題が扱われている。「ポリエステル、ポリアマイドは、容易にフィルムに塑造され、フィラメントに引伸ばされる。概して、重合度が 50~40 を越えると、その物質は、強度と伸張性を奪われ始め、この様な生成物は溶液から又は、熔融状態からも塑造可能であり、紡糸することもできる。そして延伸工程によって、生成物の強度と、たわみ性を増加し、光沢が附与される。」

彼の事も浅らさぬ、しう又つづしの研究から生まれたものの一つがナイロンであり、ネオプレンであった。然し如何に天才であろうとも、如何せん、キネは人間である。彼の研究の網を抜けたのが、ポリエステルのテリレンであり、ナイロン 66 であった。彼が手をつけながら、洩れたポリエステルは、テトロンの商品名の下で市販されている。

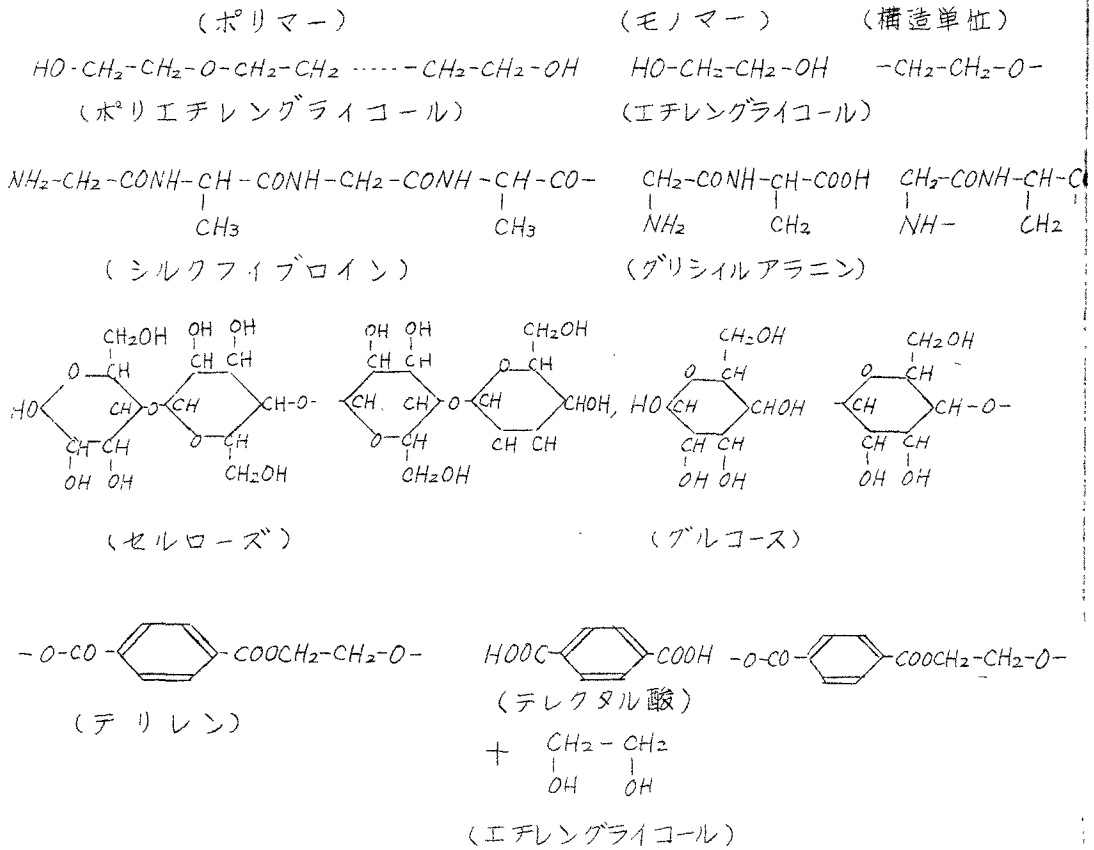
オ XXI から XXIV までの論文では、多成員環の生成法に関するもので、その性質と生成法が研究されている。主成体の臭気が Bond の数と密接に関連しており、又、Bond 数と共に変化することも判明した。——以上が 28 の論文の中、主なものの *outline* であるが、オ IV の *polymerization chemical Reviews* 8 353-426 (1931) は一部で立派な一冊子を構成しているもので、又機会があれば触れることにします。

図 I

<A ポリマーの例>



<C ポリマーの例>



又 オ XIX Many membered Cyclic Anhydrides (I) (Journ. Am. Chem. Soc, 55, 5023-31 (1933)) では、linear polymer, super polymer, structural unit, unit length, monomer, Bifunctional group 等の Terminology に触れている。

カロザスは1937年の小春日和の或る日、現在の man-made fiber の隆盛を知らずして、自から、その命を断ったのであった。

次回は尚、彼の「官能基 (functional groups) による縮合重合の説明」を載せる予定です。

人を見る眼

二回生 ふうてぶて氏

人を見る目といっても、私は決してその人の面相や態度からその人の性格や性質を知ることをしていないのではない。私が以下に述べようとしているのは……

人の顔を見る目は、見る人々によって異なる。亦その時の人間の状態によっても違う。例えば、亭々衆が長谷川一夫を見る時、彼はコンドン・パリの眼でうらやまりげに見上げるでしょう。長谷川一夫は、人間にもこの様な顔の持主がおるのかと目を丸めるだろう。学連の学生は岸首相を見る時、彼等はあの鼻の下を機会があれば、指をまげてそれに力をこめたもので短かくしてやろうという斗眼で見る。教授は授業を妨げる生徒を細い目で見ない。大村昆を見る時は眼尻を下げて眺める。しかし昆ちゃんは本すら眼鏡越しに見る。赤児の瘦顔を若い天婦は希望にあふれた眼で眺め、精神病者は空ろな眼で見る。亦他の人間の箇所、指先や手を見る眼は以上のものと又異なっている。水仕事により肌色を失った人の手は凄惨な眼で見られる。面の皮に似ず手の皮の薄いもの(上流社会の人々が怠惰者)は確かに見るにはとても美しすぎる。しかし女性でも年老いた人で鬚々がはれ上り、しわがあたかもクレパスの如き女性を見ると眼頭が湿くなる。

スカート下より見えるナイロンの袋で包まれた二本のものを見る男性の眼は、これまた瞳孔を閉ききっている。シド・チャリッシ、フランソワーズ・

アルマール等の脚はとくに美しい、とても魅力的なものである。それにひかえて君の脚は固い毛でおおわれており、まして彼女のものより黒くて見るからに気持が悪い。女性のものでも外国人の脚は日本女性の脚をりょうがしている。日本女性のものは筒型とかぶら型が非常に多い。大昔からの生活が現代にも影響しているのは歴史学者すらを驚かせている。

告 白

私は告白します。あなたの肩を抱こうとしたことを。君はとても美しかった。君と僕はいつもの二人だった。だが僕の心は、いつもの僕ではなかったのだ。君の、道端を見ている横顔がとても美しかった。僕は気がつかなかった。君は僕の理想に一歩一歩と近づいて来ていたのだ。いや、僕の心が、抑えきれない僕の心が、理想を君に近づけていっていたのだ。

私は告白します。

私は告白します。今日ゴロツキを見ました。先生すみません。私は思わず外を見ました。私は見ました、ゴロツキが肩をいからせて歩いていくのを。

次は胸に眼を向けると男性の眼は増々輝く。時によっては全身に血液をめぐるさえいる。またその型にもいろいろあるが、こんないわれは誰でも心得ているので記さない。しかしまた男性の胸も魅力がある。筋肉で満たされた健康的な色の皮膚、その上には朝夕の如き胸毛、特異な体臭、美に全女性のあこがれの的だ。これにもまして世の男性はいくらかの金と共にある門をくぐる。中はうす暗く、前方だけにライトが照らされている。奇声に渦まき中にムード音楽がなっている。それを見つめる群がる眼、々、々……

影がはるか前方にのらくらしている。時には観客の中には血走った眼をしているものさえある。終つてライトがつくと皆ぼう然としている。前方には幕があつて次の映画を待っている。

学生と 能楽	三回生 藤田清志
-----------	-------------

生まれつき突もろいのが災いして、到々 *Chain* のため筆をとらねばならなくなった。いや断っておくが決して編集委員諸氏に立きつかれたがらというのではない。折角戎々C科の心が一致してお発した機関誌であるのに一見する所、その初志に著しく遠い現在の状態をうれえでの事である。さて前置はそれ位にして……。

諸君は主協等に張られたポスターなどから本学に謡曲部があるという事と御存知の事と思う。或いは今年からその名も能楽部と改め、部員一同一さむ稽古に熱を入れているという事にお氣付きの諸君もあるかと思う。しかし大多数の諸君がそれ以上の事を理解してはいまい。いやもっと詳しい事を知っていると云う者も“X月X日京女大能楽部と合同ハイグ”というポスターに氣が付いた位であろうと思われる。尤もこういう自分もつい最近まで、謡曲と能楽の関係すらも理解しえなかつたのである。能楽は日本百来の独得ある芸術であるということは、無意識のうちに思っていたものの、謡曲が他の諸々の民谷芸能、長唄、小唄類などと、如何なる区別があるかも殆んど知り得なかつたものである。勿論、謡曲(うたい)が能楽の中で度例に對する台詞の如きもの、即ち動作(能では舞)を抜きにした能である事など思ひも寄らなかつたのである。むしろ有閑なる老婦人のやる遊び位にしき理解して居なかつたと云えよう。それ故入部する直前まで元氣発刺とした若者が、何故に又、あの様なジジムサイ事をやらねばならぬだろうと、置に正座してウナッているお証々がかえって可哀そうに思えたものである。しかるに交な動機から(決して売女との合ハイに釣られたのにあらず)入部する羽目となり謡曲、能楽の理解も深め、あらゆる会に参加する内、学生に能楽を志す者(専業としてでなく)が、余りにも多いと云う事に驚いたのである。丁度、春であれば若葉の頃、秋は時にそよ風が吹き始めてから山々に紅葉の散る時まで殆んど毎日曜日、日頃の成果を発表する会、いわゆる“学生能”なるものが、それも京都のオーブの舞台上で繰りひろげられる程である。因みに小規模なる我が部にしても、主催として、春と秋の二回、連盟参加として夏と冬つ二回、我々自身ののどを披露し(特に昨年度は織維、工芸一致協力して、

ての能楽を演ずる事が出来た)、それに観賞能として殆んど毎日玄人能楽師の演ずる能を観賞する機会が与えられる。そしてその様な会が決して盛大を極めてゐる。連盟の結束としても、決して他のスポーツ団体のそれに勝るとも劣らぬものと思う。それでは果してどこに古芸術である能楽が学生の間で支持される所以があるのであろうか。ジジムサイと一見思える謠に情懇をかける故は何であらうか。それには次の様な事が考えられる。

オーに能楽は余りにも深く底知れぬ対象であるという事であらう。学生は常に研究の態度を忘れず、趣味道楽とのみ考えているのではなく、それ故、決して舌足らずの謠い振りに満足してゐるのではないのである。我々が今、謠を習い始めたとしよう。すると一年もたたぬうちに極く初歩ではあるが一応謠える様になる、いや謠になれて来ると云つた方がよからうか。そして玄人の能楽を観賞する時など、謠を理解するのみでは何か物足りなく、次いで舞台上の舞に興味を湧いて来る。その結果、仕舞(能楽に於て最も印象的部分のみを極く簡単な形式で舞うもので丁度絵のデッサンの様なものである)を習う様になる筈である。そしてそれも進めば次に舞囃子、そして最後には能楽にまで及ぶのである。勿論、学生であるが故に余暇も充分とれず、全ての者がそこまでは行けない。又行けたとしても成績は必ずしも芳しいものではない。しかし我々は教室における研究の態度を置の上、舞台の上にまで延長させ、常に能楽の本質、現代における在り方などを考え討論しつつ、日一日と進歩してゆくのである。そしてそれでも尚能楽は我々の征服しえないものであるという事である。自分がこの道をかじる事になり、少なからず愛着を感ずるのも、能楽の“型にして型にあらず”即ち能のこころ(幽玄など)への興味がつきないからでもある。

又オニに考えられる事は全ての大学自治活動と同じく、学内的、対外的に同好の者の間における人間関係であらう。学内では自分の専攻を向わず、人間味あふれる師匠、顧問先生(本学では浜村、小西、藤本各先生、佐竹氏)の下に突になごやかに精進できるし、又四季を通じての発表会には、各大学が非常に協力的、紳士的である事も能楽部の特徴であらう。因みに本学の京女大とのハイキング(京女大とは合同学生能を始めてから実に五年余りの歴史を持つ)も親睦を図るに絶好のものではある。

とまれ、学生能がかくも発展するのは以上の如き理由からではないかと、ふと思つたのである。能楽をめぐしてウナる泣い声や学舎の隅から聞く事があれば、以上のような事を思い出してくれるとよいと思う。

積分反応入門

岩崎研究室 松本 喜代一

われわれの基礎化学教室で最近よ、耳にする「積分反応」について、学生本位によくわかるように解説してほしいとの依頼を、編集委員の方より受けたので、ここに極く初歩的にその概要を綴ってみた。

さて、3回まで以下の諸兄姉らは「積分反応」と云う名の反応を聞いたことがないだろう。どんな教科書や参考書を用いても載っていない。それは当然のことである。この「積分反応」というのは、われらの御大、岩崎教授の新理論であって、一言で言い表わすと、温度あるいは時間が一定に保持されなくてもこの理論式によって、それらのズレが調整出来て常に均一な品質の物をつくること出来る云うのである。即ち温度経過がどんなに変わっても、仕込式の反応の再現性がこれによって適確容易になるというのである。これは工業上にも非常に重要なことで、従って重大な利益と便利さを化学工業界に与えるものである。現に、その実用的効果が認められている。

さて、諸兄姉らはまず物理化学又は反応工学の教科書を持って来たまえ。そしてその中から化学反応速度論の章を開き給え。そこには化学変化の速度、反応速度の測定法、反応の次数等々が複雑な数式を混えて書かれているだろう。その中で、一定の反応進行度を得るためには、即ち均一な品質の物をつくるには、一定の温度と一定の時間が必要である云う事を見出すであろう。そこで最も簡単な一次反応の場合について説明してみよう。

今、一次反応 $A \rightarrow B + C$ を考えると、Aの初濃度を $a \text{ mol/l}$ とし、時間 $t \text{ min}$ 後にAの $x \text{ mol/l}$ が分解していたとするとAの残りの濃度は $(a-x) \text{ mol/l}$ で、BおよびCはそれぞれ $x \text{ mol/l}$ 出来ていることとなるので、BあるいはCの生成速度は dx/dt で、これは一次反応ではその瞬間のAの濃度に比例するから、 $dx/dt = k(a-x)$ で表わせる。変数を分離して積分すると、 $-\ln(a-x) = kt + \text{const.}$ が得られ、通常初期条件は $t=0$ の時 $x=0$ であるから、 $\text{const.} = -\ln a$ となり、積分された式は、

$$\ln \frac{a}{a-x} = kt$$

となる。

即ち、 $\ln(a/a-x)$ を t に対してプロットすれば傾角を連ね直線が得られ、

その勾配がこの反応速度恒数を (min^{-1}) である。

従来はこの k を算出し、それが一定になることが研究の対象になっていたようであるが、積分反応の理論によると、この考え方を少し拡張して先の式を次のように考えるのである。

今、温度 $T_1^{\circ}\text{K}$ で Σ_1 時間反応させ、引き続き $T_2^{\circ}\text{K}$ で Σ_2 時間反応させ……そして $T_n^{\circ}\text{K}$ で Σ_n 時間反応させ、各終りの濃度 $x_1, (a-x_2), \dots, (a-x_n)$ とし、反応速度恒数を k_1, k_2, \dots, k_n とすると、

$\ln(a/a-x_1) = k_1 \Sigma_1, \ln(a-x_1/a-x_2) = k_2 \Sigma_2, \dots, \ln(a-x_{n-1}/a-x_n) = k_n \Sigma_n$ となり、辺々相加え、又、 $\ln(a/a-x_n) = \ln(a/a-x)$ であるから

$\ln(a/a-x) = k_1 \Sigma_1 + k_2 \Sigma_2 + \dots + k_n \Sigma_n$ となる。敗数が非常に大きくなり、 $\Sigma_1 = \Sigma_2 = \dots = \Sigma_n = \Delta \Sigma$ になっても成立するはずであるから、 $\ln(a/a-x) = (k_1 + k_2 + \dots + k_n) \Delta \Sigma$ となり、これを微分にまで進めると

$$\ln \frac{a}{a-x} = \int k \cdot dx \quad \text{となる。}$$

数学的には全く当り前のことである。この当り前のことが今までわが國のみならず世界中のどこにもこの実験的証明は勿論のこと、このような理論式はないようである。現に多くの文献を調べても似たようなはあってもこれと全く同じ考えをしたものは見当らない。ある人はこんなことは何も新しい理論でも何でもないと云われたが、この時、私はコロンブスのあの有名な逸話を思い出して、世の中に如何に負け惜しみの強い人の多いことがとつくづく思った。「この卵を如何にして立てるや」と問ひ、人々みな首をかしげる中をコロンブスはゆうゆうとして「かくの如し」とばかり、そのゆで卵の一端をコチンとわり、卓上に立てたと云うが、諸兄弟がもしこの文を讀み終つてから、他の大学の化学の学生に向つて「温度が任意に変化する時の反応進行度は如何にすれば求まるか」と質問してみたなら、彼らはキツト首をかしげるだろう。こんな時の愉快さというものはまた格別である。

ここでもう一度、積分反応式をよく見てみよう。そうすれば一見して諸兄弟らは、 k が如何にして時間 Σ によって積分されるのかに疑問を抱くだろう。そこである。もう一度物理化学の教科書を用いてみよう。そこには、反応速度に対する温度の影響を合理的に表わす有名なアルレニウスの式

$$k = A \cdot e^{-\frac{E}{RT}}$$

を発見するだろう。

$$\therefore \ln k = \ln A - \frac{E}{RT}$$

であるから

$\ln k$ は $1/T$ と直線関係で表わされると云うのである。ここで E は活性化工

エネルギー、 R はガス恒数、 A は頻度因子である。

次に、温度が一定でなく、自由に変化するとしてもその温度と時間との関係というものは、どんなに複雑であっても受するに温度 T は時間 x の函数として表わし得る。そこでこれらの二者を組合せば、 k は即ち時間 x の函数である、ということになる。

$$\left. \begin{array}{l} k = f(T) \\ T = g(x) \end{array} \right\} \therefore k = f(g(x)) = \phi(x)$$

従って先の積分反応式は計算可能である。故に、積分反応式の右辺の値さえ一定であれば反応中の温度が如何に変化しようとも、左辺の値即ち反応進行度は一定であるはずで、従って反応は計算により容易に再現され得るはずである。又、反応時間に制限のある場合は、アレニウスの式の適用可能な範囲内において温度を適宜変えることによってその反応進行度を一定に保つことが出来るのである。

此で諸兄姉は、オートメーション華かな現在に、温度一定にするなんて、何だ、朝飯前のごとくではないかと考えるだろうが、化学反応となってくるとそうは問屋が卸さない。発熱反応あり、吸熱反応あり、更にはたとえ恒温に出来たとしても、多重のものを一度にその恒温にする事や、瞬時に反応を開始したり、停止させたりすることは、工業上殆んど難しいことと思う。ましてや、一定の温度経過をえらぶような反応においては尚さらのことである。かえってこの積分反応の研究というものが、反応工学におけるオートメーションの重要な基礎研究であると云われているのである。ある化学反応においての積分反応式さえ解れば、温度と時間をカムやギアの組合せとか、あるいは電気計算機とかによって、容易に反応進行度として表示出来るはずである。

この実験的証明は、過去幾多の先輩達によって達成されており、一般の化学反応は勿論のこと、複雑なビスコース製造における老成、加硫、熱成の三大反応、そして繊維化工における樹脂加工の際のベーキング、更には高分子の重合反応にまで及んでいて、現在は主として重合反応の方面の実験的証明に力を注いでいる。

そこで少々複雑になるが、積分重合反応ということについて話を進めてみよう。モノマーの重合は大別して開始反応、生長反応、停止反応の3つよりなり、その初めには大抵若干の誘導期間という見掛上の時間待らがある。そして、重合物生成は主として生長反応においておけるとみなし得るから、積分重合反応式は次のように考えられた。

恒温反応の場合は、
$$U = kZ - \rho Z_0$$
 と、

変温反応の場合には、
$$U = \int_0^Z k dZ - \int_0^{Z_0} k dZ$$
 と。

ここで、 U は反応進行度で、重合の場合は大抵 2 次反応であるようなので、そうならば $U = 1/(a-x) - 1/a$ となり、 Z_0 は誘導期間 [hrs]、 a はモノマーの初濃度 [mol/l]、 x は Z 時間までに反応した濃度 [mol/l]、 k は反応速度恒数 [l/mol·hrs] である。2 次反応以上の場合の k の単位に注意をしなければならない。

例えば、メチルメタクリレートの溶液重合においてはモノマーの初濃度が非常に高く、ある程度重合すれば重合液全体がゲル化したり、固化したりするような条件では、全て時間に対する重合物生成量の曲線は S 字形を示すが、約 20% 以下に希釈された溶液では、即ち 100% 近く重合が進んでも液が高粘度を保つような条件では、重合生成速度は 2 次反応に従うのであって積分反応式は

$$\frac{1}{a-x} - \frac{1}{a} = \int_0^Z k \cdot dZ - \int_0^{Z_0} k dZ$$
 となる。

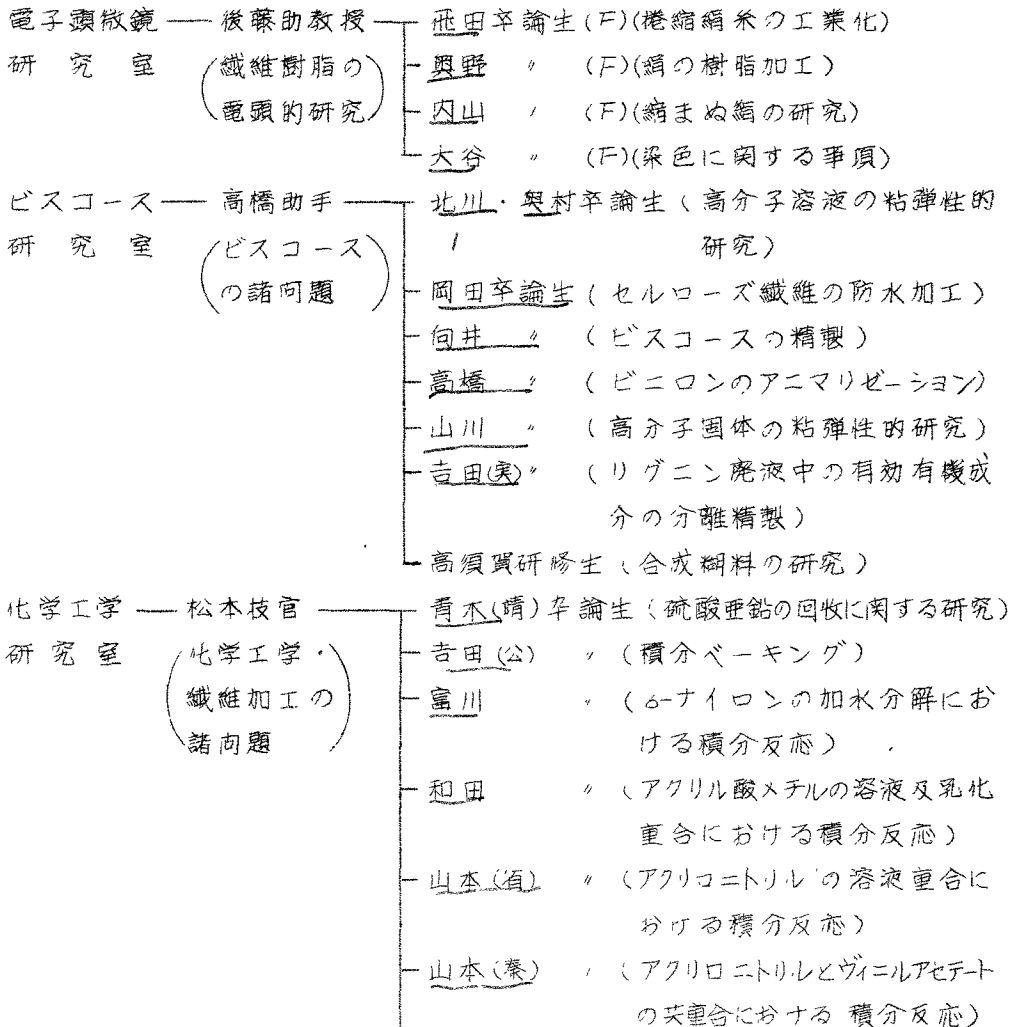
この実験的証明の最も普通の方法は 2 ケ以上の恒温反応実験を行ない、反応次数を確認してこれよりアルレニウスの式を用いて活性化エネルギーと頻度因子を求め、次に変温反応実験（温度を任意に変えて行なう実験）を行ない、それより求めた反応進行度を Y 軸に、積分反応式より計算により求めた $\int_0^Z k dZ$ を X 軸にプロットして、この両者が 45° 傾斜の直線関係にあれば上式は成立つておいて、即ち、積分反応が証明されたということになるのである。尚 $\int_0^Z k dZ$ は先の両者のデータの重心を通り勾配が 1 である直線と X 軸との交点より求める。又、 $\int_0^Z k dZ$ の計算は一定間隔の時間にその時の温度を測定するのであるから、その温度をアルレニウスの式により反応速度恒数 k に換算し時間についてシン普森の法則により数値積分すればよいのである。シン普森の法則は、 $y = \phi(x)$ において 各 x_i に対する y_i が奇数個の場合は、 $1/3$ の法則 $ie S = \frac{1}{3} h (y_1 + 4y_2 + 2y_3 + 4y_4 + y_5)$ が、 y_i が 4 数個の場合は、 $3/8$ の法則 $ie S = \frac{3}{8} h (y_1 + 3y_2 + 3y_3 + y_4)$ が適用される。この $h = x_{i+1} - x_i$ で即ち区間である。従って積分反応の場合には、 h は推定時間の区間であり、 y_i は温度測定時における各の k の値であるから容易に計算できるだろう。

終りにのぞみ、本原稿を繊維化学科機関誌「チェーン」に掲載することをお許し下さった岩崎教授に厚く御礼申し上げます。

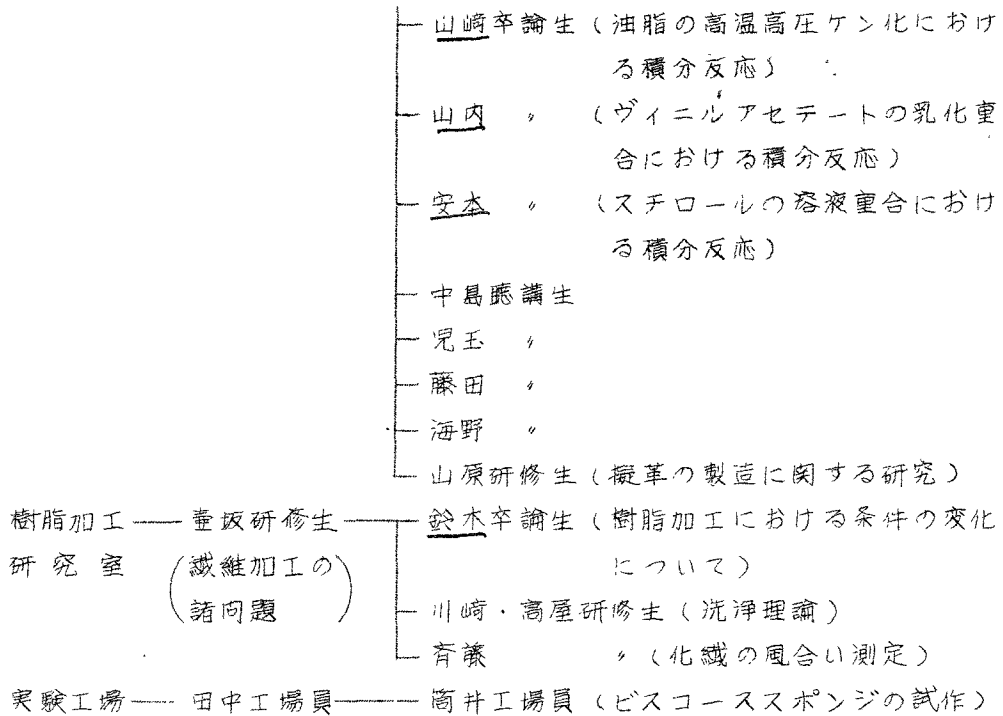
岩崎研究室のプロフィール

— 昭和三十五年度 —

岩崎教授を筆頭にその陣容は多彩をきわめ、総勢三十余名に達する本研究室は、今年も多方面にわたる研究課題と岩崎教授のモットーたる *Able Engineer - Gentleman* たらんとする卒論生、研修生、聴講生等々で毎日活気があふれている。先ず例年通りそのメンバーを系統的に紹介すると……



[研究室紹介]



常に数多くの優秀な研究成果を手みやげに *Able Engineer-Gentleman and Ladies* を社会に送り出している岩崎研究室のお家芸の主なものは、工学士をつくるための化学工学的訓練である。在来の我が国の化学者達には、研究の工業化という点において無能力な人が多かった為に、自他共に如何程損をしたか知れない。研究を実験室から工場へ移す時には必ず *pilot plant* を建設し運転せねばならないが、これには化学工学的に熟練された化学者が参加して始めて成功するものである。工場の化学技術者の日常必要なものは化学工学的訓練だけである。又研究室の化学者でも同様に化学工学的手腕は必要欠くべからざるものであって、実験の速やかな成功もこれに伴う。われら繊維化学教室の出身者が社会に出て、最も新しい技術、ないしはこの新しい技術をこなせるだけの基礎知識を備えて古い技術者達を圧倒し、大いに世の中に貢献しているのは、要するに彼らが学生時代に化学工学的訓練を受けて、優れた腕を持っているからである。これらの特色を益々養成し、一層向上させ、より一層工学士らしい工学士を育てあげるよう、教室員一同が率先垂範して着々歩を進めている。

次に一番愉快な卒業論文生について述べよう。岩研では 毎年3回生の終

りに所属しテーマが決まり次第、先輩同生より種々の引継ぎをし、四月の実験開始までの間に文献調査や実験計画をし、実験開始と共に週間報告と計画をして能率よくどんどん実験を進め、卒業までには何とかしてモノにしてしまう。中には学会に発表されるものもある。若研の運営機関に雑誌会がある。これは単に毎週開かれる文献調査の発表のみでなく、ハイキングや工場見学、旅行といったことまでこれが企画運営するのである。毎週開かれる定例の雑誌会は文献の紹介が殆んどであるが、時にはミリヤカラスライドの映写もあり、お茶とお菓子をしてなごやかな雰囲気包まれて、教員、研修生、卒論生らがダバる所である。誰方でも希望者は前もって申し出て下されば歓迎しますから、どしどしおいで下さい。卒論生はまた、野球に囲碁・将棋に、アマダに、と毎日楽しく遊んでいる。

相宅研究室紹介

清水 三郎

杆
天田
清水
朱
彦田
堀江

本研究室は相宅先生を中心に守田、高木、坂口、荒田、籠、佐々木氏と我々学生11人より成っているが、我々の研究していることはモノマーの合成重合、成型、加工、染色、樹脂加工、熱処理、物性研究等である。

先ず以前の研究の引継いだものとしてはナイロンの共重合、アクリルニトリルの重合・紡糸、テレフタル酸の合成・重合・加工などであるが、これら合成繊維、樹脂加工に関しては相宅先生が指導に当られる予定である。予定と言うのは五月末に学会の研究発表があるので、五月始めに行く予定であった遠足も延期になる程忙しく、(しかしもともとこの方面は先生のお好きな所なのでもうすぐ行けるだろうと期待しているが)目下総動員でそのお手伝いをやっているからである。まだ始められていないが、ナイロンの共重合について少し説明すると、共重合により、何とか何に似た製品が出来ないか、ということが研究されるそうです。

今年から新しく始めたポリプロピレンの研究ではプロピレンの合成、重合、紡糸、染色・加工、紫外線・偏光顕微鏡による物性の研究で守田氏を中心にやっているが、この方面は学会の研究発表とも関係があるので、大勢進んでいる。プロピレンは最近世間でさわがれている物質であり、興味が密接な関

研究室紹介

常に新しい分野を研究して行こうと意気こんでいる本研究では、この研究はなかなか盛んである。業界と密接なという点においては相宅先生で中々多忙でいつも来客があり、僕等には大変迷惑な程である。しかし貪しい研究費を補うために先生が張りきって下さるので僕等は会社からいそいそものが入手できて大いに助かる。先生はよくガメツく行かんといかんとおっしゃるが全くそのお陰だと思ふ。しかし先生がガメツイということは礼儀をわきまえないとかきちんとしていらっしゃらないということではない。我々学生がこれらの条件を満えていないと時々先生の怒りが爆発する。こんな時よく先生のおきまりの言葉が飛び出す。この方面には僕等は仲々敬感でもうすっかり憶えてしまった……

話をもちへ戻すと坂口、高木氏を中心とするグループでは紡糸、成型であるが、この部屋では今立派な紡糸機を購入して組立てている最中である。この方面がきよく工場からの依頼がある。

染色の工は荒田、鶴氏がやっておられる。

又北海道からはるばる上京された佐木氏も現在本研究室でできたポリエチレンマナイコンのロープをテストしに北海道まで行っておられるが、サケ、マス釣りの積み込みが終れば又帰って来て研究される予定である。研究は大体このくらいであるが、まだこの研究室に入ったばかりでしかも先に云つた理由で自分の研究に手をつけていない人もいるので詳しいことはよくわからない。

所でこの教室共通の楽しみといつては今の所別にないが、勤勉家ぞろいのせい、読書会をつくり、現在「有機化学の電子論」をやっている。しかし最近研究室全体でマージャンをやる傾向がでてきて、皆まだ下手だが愉快そうにやっている。又学会でも終れば相宅先生が山登りや写真がお好きなので御指導願えると思ふ。

まだアミダの集子が終るくらいだし、その上不勉強の僕には皆の研究していることがよくわからないので、紹介はこのくらいで終わらせていただきます。

町田研究室

吉田周司

30日を買って来たピンを空にするのこの分もわからないだろうし、調子

[研究室紹介]

のよい持たらぬ酒の玉で千円にするのに大した時間はいかからない。20円のチャン代で結構楽しくすごすことも知り、又バドミントン、卓球、テニス、その他出来ないものの方がまれであるという者のいる所が、ここ、町田研究室である。それに加えて、皆がいたってのんびりしているし、又何事につけても *timing* を心得ていることが、まさに大きな特色であろうことはいうまでもない。どんなに怠けているように見えても、その実、着実に進めているのも彼等である。

順序として、次に續ぐれど、彼らの研究テーマを紹介する。

<u>飯田</u>	慶夫	でんぷんの誘導体の合成
<u>北山</u>	正雄	架橋結合剤
<u>正妻</u>	洋一	インデンと無水マレイン酸の共重合
<u>森</u>	順一	銅フタロシアニン系染料の改良
<u>坂口</u>	弘二	
<u>谷口</u>	輝男	アクリルアミドと無水マレイン酸の共重合
<u>渡辺</u>	務	インデンポリマーの水溶化
<u>一木</u>	貞生	架橋結合剤
<u>吉田</u>	司	セルローズのエーテル化
<u>吉野</u>	泰	ポリメチルアクリレートの部分的水分解による 高分子電解質的性質の変化について
<u>登張</u>	章	蛍光増白剤の合成

この室で一年一回に一回、電子論の輪読会をしているし、又皆がタイプライターの実習を始めた。これも前述のような鋭い運動神経の持ち主たちであるたゆが、上達が早い。

学生生活最後の一年間であるだけに、我々にとってはこの生活は大きなテーマであろう。だから何事についても思いきり振舞うだろうし、悔の残さないような生活を考えている。

北村研究室

北村武彦

本館西の建物 2Fがどっしりしている。印刷室は陸然としているそうぞ

〔研究室紹介〕

が、なかなかどうして住みなれてみるとしっくりと落ちついていて、何となく仕事がいやしく、すべて自主運営主義ののんびりした所です。皆仕事に熱心で朝早くから夜もおそくまでやっています。どちらかと云えば実験を好きでやっていると言う傾向が強いようです。こういうと実験ばかりしているかということ、さうでもなく、先生を囲んでお茶をのみ、最近の科学や社会の話題に花を咲かせ、知らぬ間に夜おそくなつて来たということがしばしばあります。

以上のような雰囲気の中に浜村先生以下10人が住みついています。学部長なる先生は当大学一の美丈夫で、ベレー姿は最近とみにその勢力を増しつつある予学生群に羨望をつがせます。又ブッドアイデアの名人でもありません。現在は林屋、内藤両先生と共にカイコの食性の研究をされています。要するに「カイコは何故桑の葉のみを食べるか？」ということ、それにはカイコをユークワする要因、カム要因としてノミコム要因という三つの要因が必要であることが確認され、各要因となる物質の決定に目下鋭意努力中で、一部はすでに決定されているそうです。すなわちクワの葉から色々の物質を抽出して、まだ虫も東も分らぬ生れたてのカイコをモルモットとして彼等がどの物質を好んで食べるかというなかなか愉快な実験をしておられます。

浜研の紅一兵衛しの姫君こと松浦さんは先生の手伝いと共にお茶を入れたち菓子の研究をされています。卒論生はS科より1名、F科より2名、C科より以下に述べる5名です。浜研も持代(?)の影響をうけて、研究自体を纖維に近づけようという争いで、大西君は水酸基を持つポリアマイド高分子、沢田君は塩基ケテンによる纖維状酢化や他の高分子の酢化研究、北村君は高級ケテンの合成とそれによる新しい界面活性剤や高分子物質をめざし、日夜努力しています。が合成というものは暇がかかるもので、文献にはわずか一行で書いてあることに一週間も費やす仕事です。しかしモノを得たときの喜びは他に比すべきものがないほど楽しいものです。お暇な折には話しに来て下さい。浜研特製の特許品願中のお茶を飲ませます。

眞志研究室

これらの繊維化学教室の階上北面の一角に舞台を持つ通称眞志研、実験室

〔研究室紹介〕

より出ざるその特異は此の研究室には求め得ざるものにて、当初は馴染み難きものなれど、日を経てはこれこそ当研究室のムードに欠くべからざるものと認むるに至らん。

何となれば、この舞台において温厚実直をもって知られる貴志教授を領袖に戴き、教授の九大における後輩たる武内講師更にS科出身の竹田技官、以下のメンバーが最近斜陽視されがらの蛋白質繊維に化学的メスを加え、且つ又現在刮目の発展を辿る化学繊維との相互関係を解明せんとして、斜陽なる烙印の不名誉挽回に日夜精進を競けていられる故ならん。

諺あり「故きを温めて新しきを知る」と。現在の化学繊維の研究に比し、天然繊維の研究を整んじ得る理由や如何。過去の研究を以てしても、天然繊維に未だ究め得ざる面、多々あり。而してわれら当研究室の一員となり、未だ日の浅き者にても蛋白質繊維研究の稀少価値と思わずには過ごせずと云はん。

されば当研究室のムードたるや田面楚歌の面持ちにて上述の研究に固執あるのみと思わるるは心外なり。領袖貴志教授の人柄の滲む実験室のムードはまさしく春風駘蕩、微塵の固苦しさも認め得ず。武内講師、竹田技官両氏も実験の指導者たるのみならず、硬歌共に人主相談つよき助言者たり。更に両氏の家庭におけるよきパパぶりも伺い得て、かかる研究室にありて、筆者も水さ昇たる魚の如き感あり。

次に卒論生は今年度は又一人、昨年度の二人に比し50%の減少をきたせり。苟、この卒論生悉人にあらず善人にあらず常に真面目と不真面目との間にあらん。且つまた要領の良き事天下一品にして、筆者のつとに反省之促すところなり。

如うるに当研究室は小せ帯にして廊下を東に位置する町田研究室と種々交充を果つは、これわが貴志研の伝統にして協調の精神まここに充分発揮されたりと云うべし。以上、拙き文にて貴志研究室の概観を記せしが、下に各研究事項を掲ぐ。

貴志教授、武内講師 「栄養の相違による蛋白質の質的变化」 此れは現在に至る定説を覆す注目すべきものにて、一昨年度日学術奨励賞を受けられたもの。

竹田技官 「蚕に対するVitamin B₂の添加量とその成績及び含有変化」

川瀬卒論生 「羊毛中のCystine含有量の変化について」

昨年度卒論生・白尾三樹氏の「Kame」続行。



遅れていた Chain No.5を本日送ります。
本機関誌もようやく5号に達し、その目的とするところの学生間のつながりの意識を強め共通の問題を追求するという使命を少しながら理解してもらえたと思います。今後も話し合いの場として、本誌を限りなく発展させて行き、学園生活を楽しいものとする崇高な目的に少しでも手助けになれば幸いに思います。今後の御協力を期待します。

なお、別記のように、次号原稿を募集しますので、大いに批判なり、意見をお寄せ下さい。

(編集子)

発行日	1960.6.10
発行者	京都工芸繊維大学繊維化学科学生
印刷	北斗プリント社 TEL・(7) 0231
編集	繊維化学科学生機関誌編集部
編集代表	荒谷善夫